

視点

最近個人的なテーマになっているのが「指標」です。物事を測り、分かりやすく伝えるための「ものさし」のようなものだが、この設定が難しい。ずれたものさしでは、当事者の満足度が正確に伝えられないことも多いからである。「地方移住」にも同じことが言えるのではないか。移住者支援制度の充実度、医療介護体制、子育てのしやすさ、交通の便、自然の豊かさ、伝統的な景観・文化の保全、災害リスク等さまざまなカテゴリーを切り口としたランキングなるものを目にする機会も増えた。

二度会ったら友だち、「友だちの友だちは自分の友だち」の感覚に似ている。

新しい事業を始められる余白もたっぷりあるように感じる。少人数の職場や産業では、大企業の中の代替可能な「機能」として働くのではなく、代替不可能な「役割」として受け入れてもらえるのも大きな違いである。



甘楽町天引

もり えりこ
森 栄梨子

NPO法人自然塾寺子屋海外事業部

縁で始まり相性で定着

インフラを利用し、多様な働き方もできる。例えば東京に打ち合わせに向き、その後のやりとりはメールや電話で行う。東京に出たついでに会食し、その日のうちに帰宅、翌朝は元気に出勤する日も多い。「昨晚はありがとつ。ただ今満員電車で通勤中」という友人からのメールを見ながら、私は「これはHさんのお米で、これはSさんのお米…」とほぼ全ての食材の生産者の顔が分かる朝食を食べ、おいしい空気を吸い、山々を見ながら会社へ向かう。

他にも挙げきれないたくさんあるが、移住満足度を測る指標とは何だろうか。結局は「縁で始まり相性で続く」ような気がする。今日、地方移住に関してさまざまな取り組みがあるが、限られた人口を地方同士で取り合ったり、数字中心の議論には違和感を感じることも少なくない。ただ、私のように甘楽の魅力を感じ相性が合う人がいるならば、幸せのお裾分けとして縁つなぎをしていきたい。

（このコミュニケーション文化は外から来る人にとって非常にやさしい。地の人は「この辺の言葉は汚いしきつい」と言っが、私にとっては裏表なくストレートな表現なので変に気を使うことがない。それだけでとってよかったから、面倒をよくみてくださる。両親や友人が遊びにきた際、近所の方や食事をとった

次に仕事や働き方だ。農村には仕事がないと思われていることが少なからずあるが、実は働き手が足りないと感じることもたくさんある。また

地方移住の指標

【略歴】京都府出身。嵯峨野高卒業後、米国留学。国際交流に携わり、ホンジュラスで青年海外協力隊員を務めた。2014年から現職。県と甘楽町の地方創生懇話会委員。